



新板  
繪入

加古川本州綱目  
一之卷



1608  
1





序

河市

幸堂私印

富田宗典印

本

さし白<sup>の</sup>ひ袖<sup>そで</sup>梅<sup>うめ</sup>花<sup>はな</sup>の中<sup>なか</sup>に新<sup>あらた</sup>婚<sup>くむ</sup>をまへん  
 おか<sup>お</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>水<sup>みづ</sup>か<sup>か</sup>が<sup>が</sup>よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>び<sup>び</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>  
 は<sup>は</sup>ふ<sup>ふ</sup>字<sup>じ</sup>も<sup>も</sup>端<sup>はた</sup>々<sup>々</sup>ふ<sup>ふ</sup>青<sup>あお</sup>墨<sup>すみ</sup>の<sup>の</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>就<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>も<sup>も</sup>き<sup>き</sup>針<sup>はり</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>糸<sup>いと</sup>を<sup>を</sup>志<sup>こころ</sup>袖<sup>そで</sup>と<sup>と</sup>結<sup>むす</sup>び  
 一<sup>一</sup>。自<sup>みづか</sup>笑<sup>わら</sup>む<sup>む</sup>其<sup>その</sup>碩<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>訓<sup>しん</sup>一<sup>一</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>  
 妙<sup>たぎ</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>ち<sup>ち</sup>一<sup>一</sup>様<sup>よう</sup>本<sup>ほん</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>紙<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>あり<sup>り</sup>  
 う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>一<sup>一</sup>版<sup>ばん</sup>本<sup>ほん</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>海<sup>うみ</sup>と<sup>と</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>

三之三

三之三

とて。さう。か古川本茶細目と歌  
やうらら茶のひり。総て又書らじ  
く。初書れ。さき中。龍よめ海い  
ら舞し

咽和

むつ乃

むつ乃

自笑年暮似

増音自樂

か古川本茶細目

我後編  
教訓  
茶の巻

目録

第一 教書と持書にてをれぬ沙汰を白眼湖

茶葉は箱入茶地は有とあり申す

溜てもいぬぬ網の目と風聞

茶地は椅子若きとあると面瘡

茶の巻

才二 後かあまら能き告令の仕掛親父

其身と業の間を切海の色は語

後と業ふ又らまきと都の乃り

三守彦の足代は移とと飯袋用

才三 至と痛ひふからん深の野巾持柄

良茶とのん中ゆらゆら由良の隠系

右傍の深切の干珠満珠の玉輝

園の敷ふらまきと俄の宗匠

① 一枚を持寄にして世に沙汰を白眼湖

神農氏本經と記して後漢陶弘景増益と名医別録と伝て世

又遂に及てて明の李時珍本草綱目とかと元来本草會要皇令玉

去石の於此記し傳るるいあじとして造化のやうに面白細工かも

やうぬとハ胡麻好少て蘇乃味らんひもまの香の服居て時斗州の

記くくさつ分又少しあふと記ある合効小が亭主れ胡麻とありて世

に狐毛とありてまた久のあふ絲も物好葉は飯道て好小抄好むは

園圃とひ記してま本に原教とわかた星より星と御淋と放た伏令

去石小る物好のま世利守好少しと板と限らば虫臭れ乾物して

并と殿は合款の羽毛にまき障眼銀香して世とあせ世とまらる葉

葛の小菰もつらね極小三井とあざむく風情有て安付て傳はと求むらん  
小治て終よハ傍どるむも出朱る方ね自綱目物号入の雁社小葉葉傳  
の板敷近五のくむつとあざむいて安付伝も又好の人も出朱るりて其  
字中さよびて細くもど心もきりけ人の首とるまが加古れあつと  
云云の末小して此加古川出朱のくまきども後士友れ身とあて久く  
伝どもも勤い子に傳りてちる近さけ黒いけ田地を求めて限伝伝神  
小生れ先祖の志伝と歎けるあもあれ又好も中伝傳者の意もこと  
むつかしく神もけき地は和訓はひ曲るゆよりほは是も好むじて  
け三及とららぶどやけて只をれんとやん程の面白さもゆじと情もあ  
絲其て造化の細子他意け余和んはててま来に善伝りども父母と  
てあかくえよりこまは教きてよりま後乃勤い者根の天満文に朝夕  
てまはとららけしての信をが家の神樹おも伝極おも此社の外はるる

根の雲への回者伝生多ふりよこの様抄をれ今を是に伝むがまどるも是より  
志て出雲あるをとあてわまもあやと入あを申伝もて近を示白知の  
源八とて是もまの伝に連り近付小あるもあはまて若根の境内か  
の教を身もつらむくを易くてまにとぬ目進もかくい源八六百姓が  
海川をく伝をれ伝合らぬ漢と好て敷よりむり漢あま伝伝は神  
まも出る小もゆれ加古川市川も海海色の破網を打むとて  
まもよいかそくくあじとて自思ひ屋かのるもあまづわ若根の文へ  
勤い志も百姓いりて止て新傳史小傳系の名をゆる男一止正也  
ハるもの有るも小く其に細伝内よわあやるれとつと遠入神伝の  
綱目物物はに葡萄あがく諸系よりれま日わあんで見付とれ様  
嫌もとそくあれと案をさるむぐ埋火突出せば源八も吸付くこと  
むいのと較乃湖と伝のまむも伝とあまはあんで思付こ



源目新  
て  
うらぶ

なをえんじ  
もる敷もあは  
あつゆいせん  
西よ

こまは  
けまわ  
かた

あ  
む  
そよ

か  
あ  
は  
あ  
あ



か  
川  
源  
い

も  
あ

あ  
あ

あ  
あ

この鮎二本あり二細めふらぬ鮎七枚をとりて  
りやうとせんばんとうぬがけ加古川のみに  
そのをえん付と見えどぞどもぬのとねんし  
不慮あやのせ候ハ抽わりてきこ事もあつ  
牙と元々の川此波増ハおん細の下為悪  
るをまごうとせりてん形をえてと波のあ  
そがとらたてていよと本合の叩てあけ  
終ぶ笑う波の波は筆をぬる事終りぬ  
とて戻りまうこと海けけまご細目  
あゆまうの石にもとらぬ河原あ  
しけんあるも岩屋たよりまごの  
清石ぬ久肌石をどておの窓と窓  
又いつでも同じ位のわさか  
てをいふも持てハおせと  
てせんを波涌ハ連立てと  
の戦ひをくまばりいん  
あそと見えんあそと  
くまばりのどみえ  
るひみえ  
うねと下より  
川のあさ  
る小濁り  
は汁物も  
き妙くし

をいふも持てハおせとるの出る米  
てせんを波涌ハ連立てとを案内  
の戦ひをくまばりいんちるも  
あそと見えんあそと加古川の川  
くまばりのどみえあそとつか  
るひみえあそとつかあそとつか  
うねと下より清し波の勢ひ中  
川のあさうらと水と水して清し  
る小濁り増はつて川とわ  
は汁物もあつりけさバ見  
き妙くし中らあも源ハ







いふか中人控此上様もやるとらりてせと流るゝ懸て二人も交  
て参りや。扱ひしむる後、舟上御人仕出づるの上りりてあつま  
の解は是か。又流る舟出で繩を結て舟一網入て木を舟出てお、や  
とり、流る舟も舟と成て大久保舟を沈めたりて今の切付と御出  
てお、ややと細目おがふと思ひや。友直同士の味切は二人ハ別を御出  
ごまの吳物又字か。柱の葉の産所垣の書きいさうとあ、ん、ひ  
合とる。吳物の服鼻とあ、ん、香を味うう、か、後、い、と、輕、と、あ、て  
よ、う、浮、あ、り、浮、して沈むとあ、ん、か、州、か、ん、え、れ、後、の、か、ま、り、ふ、と、あ、  
ど、垣、の、ま、ま、の、懸、る、舟、い、さ、ゆ、り、と、あ、ん、大、右、有、て、是、と、文、保、一、小  
遠、ひ、あ、た、い、吳、物、と、心、葉、の、け、く、や、ど、と、あ、ん、て、お、産、官、利、の、叶、ひ、船、の、後  
び、も、さ、ん、や、り、て、き、を、れ、先、か、て、極、め、り、突、落、し、後、も、空、け、バ、二、人、小、か  
く、し、て、井、川、と、川、流、る、と、い、つ、る、あ、の、事、

二 後かあまのいよごよふ念は仕掛親父

毛龜の来い暇ふた。編の字掛織の事といひ、遠い小方。振  
りも世のあしと、兎角不易と、いふ世は、宜い海、師匠、垣、各、判、友  
鎌倉のその、遠動、お、と、あ、ん、又、あ、の、事、い、つ、く、あ、と、あ、ん、い、あ、  
小、て、い、な、後、も、あ、い、ひ、い、と、い、又、あ、の、事、い、つ、く、あ、と、あ、ん、い、あ、  
い、つ、く、れ、店、も、物、も、あ、い、は、い、は、い、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、  
り、も、あ、ん、て、あ、の、お、海、流、も、遠、い、は、海、流、を、加、ら、る、の、い、て、あ、  
各、ハ、敵、中、と、傳、ら、ぬ、は、方、あり、と、切、替、て、果、あ、る、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、  
ぬ、も、れ、終、り、は、後、も、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、  
返、し、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、  
ゆ、き、め、り、と、い、く、人、を、傳、せ、し、と、い、く、あ、ん、い、あ、と、あ、ん、い、あ、

あづ〜世に...  
 ありやうて...  
 梅...  
 一...  
 町...  
 己...  
 も...  
 け...  
 常...  
 愛...  
 よ...  
 ね...

ろく...  
 つ...  
 の...  
 て...  
 が...  
 女...  
 侍...  
 ね...  
 小...  
 一...  
 ひ...  
 万...

...

...

にさりとていかにいぬ汁の膏を乗せれども進もあ中てぬぬがうあんと  
漸しきうはして置て本て彼處を去りし合つてのあ茶を下のあ搦捕  
るのてさほくはらぐ扱はらうてさきからぬぬがうてさきからぬぬが  
いと又いかにのお終よあんで今夜はとさめては置てさきからぬぬが  
（注）てねまゝあまよでぬ期二日研の茶をわらうては置てさきからぬぬが  
小指がうるげのて是はいかにの智恵子はしてさきからぬぬが  
明てはぬの内をての粒に朝の強向とさきからぬぬが  
かけは置て本ていかにの注進よと茶を利目とはぬぬが有折今と限りの  
病人小独冬湯と置てさきからぬぬがは扱茶も利きくおはらう  
強名人の初度り小不機嫌な顔とさきからぬぬが一息も親仁も出て二日研の茶  
ハ彼茶乃中とさきからぬぬがの服の息もさきからぬぬがのあぬがうてさきからぬぬが  
とねてもうらうらうと一茶入もさきからぬぬがのてさきからぬぬがのてさきからぬぬが

バガ内ハ一後りて二女お命の教ハいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
子と宜いさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
今と置てはらうぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
さふさふぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
ておはの替あも首度でさきからぬぬがの替はらうぬぬがのいさまぬぬが  
くぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
はらうぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
ゆりがえぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
五七日はさの風はぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
あかぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
らぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが  
内なるさきからぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬがのいさまぬぬが



形ても五里十里の久方ばかりに凡そねねの遊課せしむるにありやうに  
 も有候本後(こゝろ)遊(あそび)係(けい)ひぬるをまよおぬけうをわびりてこんねね始(はじ)て  
 ひらうあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 見(み)渡(わた)せむ殺(ころ)すも用(もち)ひにびつ内(うち)無(な)き程(ほど)あはれまか建(た)てはるは是(こ)の代  
 かにも見(み)えたりあんでいけあはれまか建(た)てはるは是(こ)の代  
 んとてあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 こも若(わか)く合(あ)はれもあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 き毎(まい)どひひらうとあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 立(た)ち出(で)扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 入(い)るてもわりのねあ申(ま)連(れん)何(なに)ぞも松(まつ)有(あ)りてあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 らうと字(じ)の強(つよ)い出(で)扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 らせりともあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり

もあひあはれねるものもあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 申(ま)すともあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 くあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 の二(ふた)つも違(ちが)ひなくあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 好(この)む女(め)中(ちゆう)は風(かぜ)信(しん)といひあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 をあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 もあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 まもねねはあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 其(その)時(とき)室(むろ)のはおて風(かぜ)は女(め)帝(てい)と申(ま)すかあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 と申(ま)すもあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 甲(こう)はたれを病(びょう)を自(みづか)り申(ま)すかあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり  
 と申(ま)すもあて扱(あつか)すも初(はじ)めははかばかして後(あと)と頼(たの)みあひくとも明(あ)りたり

若之巻 第九

十一



このり海をうねりしる風百もいしりてのりらういふやうに今も是の  
まじくゆもかきひやうのたふへは伯島の徳をさし今信之教としていふ  
るひん徳もせぬかたゆてさうくおせし付てふ速はゆらめて徳の和もほび  
ふ家のほのあまも徳徳をいへん徳申すと徳とふは徳徳をいふこと  
の考と第ふそ徳徳情はしととも徳徳の中やうとあり徳の義何ら  
宜れい徳とれとささむそと徳徳を付て速ひよかり徳よともほびの  
徳りふか勿偏近の徳はふていふてしきさうふ近布でもさゆ徳の  
て徳徳の徳とあせは徳徳大徳申す徳申すやんあ徳を言の中である  
たりとさうあうそ徳と徳徳を建徳して徳信を申すの徳の徳も  
のぬくへいぶつとささむそ徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
大徳いひも出来ともども徳徳止りひらり行ても徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
とささむそ徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である

ゆりんといふをいふとささむそ徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
も大徳とあせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
とささむそ徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
今二百あせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
徳徳とあせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
より二入連の徳徳申すあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
百あせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
やそつとあせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
ささむそ徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
あせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
迹に出て徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
せぬあせは徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である

徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である  
徳徳とあせは徳徳大徳申すやんあ徳を言の中である



用よかるもあまのそぢりし事算と揃へてま教身よと娘の髪より  
かりま彼の橋邊のそぢりし日の暮るれば出まのいねいあゝぬ髪を  
まよとそ併ね屋よりねと泣く代が又一歩かつて御子朝よお日影  
こぬと二人を併ね使てもゆかりねるる歌るやつまでまよと  
ろりもあまのそぢりし彼のそぢりしあまのまよとあまのそぢりし  
の髪をまよとあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし

### 三 末と病いふからん深の歌巾の柄

扱も伯良娘の老女星中よあまのそぢりしあまのそぢりし  
の上より力泳よあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
ふも有風情あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし

あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし  
あまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりしあまのそぢりし



山中の山  
家あり  
病氣

おちのあき  
さうかひ

法師い  
あの手  
病中  
かきさ  
こす

おちのあき  
さうかひ



松海村

全一

おちのあき  
さうかひ

おちのあき  
さうかひ

おちのあき  
さうかひ

おちのあき  
さうかひ

て業を引ひたつてそふ其申も裁り割たごし笑又ハ狭小刀研磨じてまこ  
むが後にも原をけきより京地のる小匠で大半は病いと源切と申ひる傳  
くことと同意の業と申ひるがうが病いと申ふかし中をみとらりてか  
疾を極まぬもゆかていおとよりのてきく未疾漢くひも今日  
は中と膝る亦有てそ思ふか針の端苗そとをいと久いよびあよハ  
お系あくるをそえわらうがゆかよまよけ五六月の日はまふともみか  
このあがる病いとあつこれほら病れてそのを方とあり一せともま  
こせてこ茶のね射わうか針とせんをいほらひきて病むれおの  
ことともいひ直してゆべらるうけいこのときまひを極せりてこもつて足  
をいじつておきて月にお清しけら之矢間内考るうう源切お  
のとおも枝よとがりてふも又なせもうがて垢がほこを糸に出合て速

とあくけひ入って昔新と聞かちわいこのこととこよを付てゆん  
とる力味出ては源切は若人の毎々の由を今月にか指るとく奴の内よ  
かほと襖と明とびらあて業内なるよこもおるひらひらひら  
かたはつえをようくえはゆるる危爾自分のを付ては引さるたれ医者  
疵のを染いつても皆言疾あはほとやうくくとのを扱く皆もあるの  
大はせゆえに女が疾おして死していなまていまよ未付の報種あるの敵の  
内もすでも汚らむの義勸を付てはまはまをこれく神を屋后公ま  
三韓と考誘利とゆかおははらひ今く日本は正道より神は虎押おと  
誘利とゆかおははらひ自か扱のいほはらひてのひねひを女と考し  
もこるるけらひのあつとやるんと純とせくんとあふ而よ能くと并て  
あふこれ神を屋后こも考疾も病あひまきよゆえに女の方を疾お  
氏運ゆはまのいけのあつとせくしとて垢がほこを糸に出合て速

ハ中々あふくして笑ひては老人の由らるる子孫志を無念の人と  
しるは福よいかと猪とていふなるも猪もや我を猪としつて猪と  
猪とぬ某仇とむいふもいふも後死や又猪死やぬるは  
腎者内換扱ハ中よりハ腎の者亦乃浦魚の扱扱ハ中より傾  
味ともみくるとぬるはゆして中々みず痰の扱扱ハ中より傾  
け大款とあざむくは正史とていふはらる経程報られぬかあつやまは神  
之の居る三韓責むる人ももるいふもなるあざむくは後死やぬるは  
帝三行つたられたる武内は宿務討治の事あかも年二百宋也つて  
如中記ても字をばむは治めとす所人あもよまの支記つるものよは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは

いふの御代はくともあむつやちおの下知とよくも軍敗軍とつるつゆ  
ハ稀くともよ海上湖の満干と自中よとる武二つとて神くは海ひあむ  
軍ひつと負つては後地の御より日本は神くは海ひあむつは  
神扱事の指のむくもあむつはあむつはあむつはあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは  
あむつこのあむつ眼つる人もあむつ者もあむつあむつは

くしぬ教を問ふ森も娘の月かまの用のるもあはりがほおはりのりて  
能と試えてあゆむとたやにたしりより親方も被定と小まを去来方元流を  
るて勤めりともども生かす付ての好よりと時よめれ月よ森ておのれと家  
けりてありたし森の時より括出てお進よゆるとまも森入りも多し  
又狂而中もともともる教といひゆめづ傍さ付後もぬりし或は六月十日  
の教又森の時より括出て傍よ余言をりしや運向りてとつくゆりま  
と狂し座裏所の時次うらむひゆりてつと森も森も入んをせし  
森もあつり中ときやめしとまをまて例は伏者中めと軒と建てまを  
森も流のりまをまの若き昭と屋有明の燈を提て出てと軒をり  
よ盗人もとりかんとまぬ男もまをぬるひ傍よ裸方小ま流かふた男  
がけつりりしとくともぬり例よ秘室物よりぬ出せし秘室有り盗人  
しと路げのあ内もぬり秘室方に運流をわて森も西月あつり

てござりまた又今候ぢも堪忍あり候扱て出まて只今とびにばは運あ  
とゆりかゝる候の傍もゆり裏所の時次は垣外あり付まてとこか  
明て遠入はしと初ねにまぬし波来しよよと森も盗人かいつ一人何  
うと遠入をまぬ味とまぬ屋振の物干紙をまぬとんえて吉書はよしと  
掛りるんども呼括てりあをくして信書といふも呼括れと盗人ヤヤ  
し呼括れよあお延敷丹をまぬすやして湯の人の代付て森もびつり  
てお進出と捕由まぬゆりまぬとぬれと港町うら屋根紙よ森かつて  
客も尖形紙の有りそ森もあはる端ごまをよめて物干かゝるひ  
るて漸とる合せを明て括てんすれと秘室物とんて戸棚のあま森  
骨格しやと森もまぬとまぬとまぬとまぬとまぬとまぬとまぬとまぬと  
森もあはる離の格も括出て来て及とまぬとまぬとまぬとまぬとまぬと  
てもあつりつら流盗人とあつり思もぬれよんえてつらぬらまぬと

ところ引つゝあつて南無三尊とあつてなほいふもなむせぬあつて一戻ゆと  
 はげよゆてきて下さるとは後 又倍いやつあつてあふれおあきいふま  
 してゆつと表とめて突出せぬほど遠ゆつと師おて變て親の機嫌令々々  
 物が能楽かけ紙が戻りそふころおのり格の織巾のゆふとささりありあ  
 さつて二條師お今にけふおさきさき又布持て係生としてまの束りたかあつて  
 付ますし順また星以上とよけてそまむに恨あはれさうにゆるゆるこゆあつて  
 一層おかまふころより其の柄が出来たら物の色いろあつてさうさう病がかりと  
 さつて夜更がさつておのりお極面白くゆるゆるおのりさうとゆふに毎汁の扱  
 嬢の神として三人もほひて又明日をいふてさうさうさうさうさうさうさう  
 ゆりも糸やちりの袋を取寄せてけとつて野回草あつて天中ゆひお保まぬの行ありと  
 かつと驚あつておのりお極面白くゆるゆるおのりさうとゆふに毎汁の扱  
 かの一と世は集りたること



巻之巻紙

あつて

